

主 題：旧約に見る神の救いのご計画 IV
 聖書箇所：創世記 6－9章

きょう宣教師たちの特別賛美を聞いていて一つ思い出したことがあります。昨年、エリックたちが帰る時、私は教会で彼らを見送って、家に帰ってしばらく横になっていました。突然電話が鳴りまして、それは樋川姉妹からでした。きょうエリックが賛美した時に持っていたバイオリンを教会に忘れたから、すぐに持って来てほしいと言われました。果たして彼らのフライトに間に合うかどうか心配でしたが、とにかくバイオリンを探そうと教会へ行ったら、幸い礼拝堂の後ろにあるのを南姉妹が教えてくれました。それを片手に伊丹空港に向かいました。空港に着いて駐車場から出たら、ある姉妹が迎えに来てくれていて、何とか間に合って安心しました。大事なバイオリンですけれども、彼がきょう引けたのは私のおかげかなと心ならずも思っていた次第です。（笑）

きょうは、旧約に見る神の救いのご計画のNo. 4 を創世記6－9章を通してお話をしたいと思います。

《序論》

いつも載せている聖句ですが、ローマ1：2－3「2 この福音は、神がその預言者たちを通して、聖書において前から約束されたもので、3 御子に関することです。」、すなわち新約聖書のすべての主題は私たちの救い主、主イエス・キリストであり、この大きなテーマを持った一冊の本だということを今まで学んで来ました。私たちが読む時に、それぞれが働き合って旧約は新約を、新約は旧約をより深く理解することができるものであるということも学んで来ました。ローマ15：4には「昔書かれたものは、すべて私たちに教えるために書かれたのです。それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるため」とあります。「昔書かれた」旧約聖書は私たちに希望を持たせるためのものだと新約聖書は教えています。また、ヨハネ14：6では「イエスは彼に言われた。『わたしは道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。』とイエスご自身が言われました。イエス・キリスト以外の救いは人類にはないということ、旧約聖書また新約聖書を通して私たちに教えているということも学んで来ました。

きょうもそのことを頭に入れながら、一緒に学んで行きたいと思いますが、この学びは約2年前から機会あるごとにお話しさせていただいて、これまで何回か学びました。私たちは1週間前のことも忘れる者ですから、2年前といえばほとんど記憶にないかもしれませんが、少しずつ記憶を取り戻していただきたいと思います。

◎ これまでに学んだこと

① 人は神のかたちに創造された。 1：27

まずこれまでに学んだことですが、創世記1：27、神様は「人をご自身のかたちに創造され」ました。「われわれのかたちに、人を(かたち)造ろう。」(創世記1：26)と言われた。神様という目に見えないかたちですが、その本体そのものを反映させる、そのような存在として人を造ろうと言われたのです。そして造られたのがアダムであり、やがてエバが造られました。神様はお造りになった人をエデンの園(「楽しい」の意)へ置かれました。そこにはたくさんの木が植わっていましたが、園の中央には「いのちの木」と「善悪の知識の木」という2本の木が植わっていたと聖書は教えています。神様は人に言われました。園のどの木からでも自由に取って食べてよろしい、でもたった一つ「善悪の知識の木」の実だけは取って食べてはいけません。あなたがたがこれを取って食べたら必ず死ぬ、食べなければ死なないで生きて行くことができる。これが神様と人との間に結ばれた約束事でした。

② 神は悪魔にさばきを下された。 3：15

ところがサタンという存在がありまして、蛇の形をとってエバを誘惑したのです。神様はこの木の实を取って食べたら死ぬと言われたけれども、そんなことはないよ、決して死ぬことはないよ。エバがその木の实を取って見ると、とても美しく食べるによさそうだったので、彼女はその木の实を取って食べたのです。彼女はあなたがたはこの木の实を取って食べたら死ぬといけなから、食べてはならない、それに触れてもいけないと神様が言われたと、サタンに言いました。神様のことばと変わっています。彼女自身が悪魔の誘惑によって、その約束事を勝手に変えてしまったのです。そばにいたアダムにその木の实を取って与え、彼もそれを食べたと言ったと聖書は教えています。ひとりの人によって全人類に罪が入り込んだ——アダムがこのひとりの人でした。そして全人類、アダムの子孫すべてに罪が入り込んだと聖書は教えています。その悪魔に対して神様はさばきを下された。それが創世記3：15です。

③ 神は救いのご計画を知らされた。 3 : 15、21

これは原福音とか原始福音と言われる箇所です。「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」と。ここで悪魔の子孫と女の子孫の関係が言われました。これは既にお話ししたとおり、一般的には悪魔の霊的な子孫と女の子孫、すなわち神様を信じる霊的な人たちと考えられがちですが、みことばをよく見ると、この「子孫」というのは「種」あるいは「すえ」と訳されている箇所もあります。ことばの意味は「種」なのです。人間の存在を見る時に、「種」というのは男性が持っている、いわゆる精子と言われるものです。女性は卵子ですから種がありません。そうすると、神様は、男性と女性との関係において生まれぬ「女の子孫」がサタンの子孫の頭を踏み砕くと言われたのです。この「女の子孫」がサタンを滅ぼすと預言されたと私たちは学びました。そして、聖書は乙女からひとりの男の子が生まれる、イザヤ書に「その名を『インマヌエル』と名づける。」というみことばを見ることができます。

罪を犯したアダムとエバはエデンの園から追放されます。なぜなら、もう一本「いのちの木」が植わっていたのです。人がその「いのちの木」の実を取って食べて、永遠に生きることがないように、神様はエデンの園から人を追放されます。そしてケルビムと回る炎の剣でエデンの入り口を閉ざされ、人がそこへ入ることはできなくなったと聖書は言っています。

④ 人は良心に従い、神に喜ばれるように生きるべきであった。

最初、アダムと神様との間にはこの木の実を取って食べてはいけないという約束事、ルールがあったのですが、それ以降神様は人類、アダムの子孫に約束事を与えなかったと聖書は教えています。なぜならば人類はそれ以降自分の良心に従って、生活をして行かなければいけないという責任を負うようになったからです。

人はどのようなものであったか——。創世記5:1からアダムの歴史が記されています。アダムにはカインとアベルというふたりの子どもがありました。神様に捧げ物をする時に、アベルは一切傷のない羊の初子を、カインは農作者でしたから、畑の作物を持って来たのですが、神様はアベルの捧げ物をよしとされた。そのことによってカインがアベルを殺したことを私たちは学んで来ました。

⑤ しかし人は、自分を神として生きるようになった。 5:3

今アダムの子どもはカインだけとなりましたが、3節「アダムは、百三十年生きて、彼に似た、彼のかたちどおりの子を生んだ。彼はその子をセツと名づけた。」、アダムの三男です。ここでよく注意して見ていただきたいのは、「彼に似た、彼のかたちどおりの子を生んだ」というところです。神様に似せて神のかたちに造られた人は、罪を犯したためにもうそうではなくなり、アダムの子孫は彼のかたちに似た、罪の性質を持った者として生まれて来ました。当然カインもです。こうして私たち罪の性質を持った人間は、その良心に従って人生を歩むという状況に置かれたのです。しかしながら、人間は自分の自由に生きるようにされた時に、本当に好きなように生きるようになったとすることができるのです。

⑥ その結果、地上に悪がはびこるようになった。

そのような中であって、エノクという人がいまして、神とともに歩み365歳で天に上げられたと創世記5:22-24に書いてあります。エノクは、アダムから七代目のセツ系の子孫です。ノアはアダムから十代目のセツ系の子孫になります。エノクは死を見ないで天に上げられたということを私たちは学びました。彼は死ななかつたのですが、神様によってよしとされて天に上げられたのです。これが何を意味するかは後で学びます。

1. ノア 創世記6:1~

1) 地上の様子

(1) 人、地上にふえ始めた 1-4節

6:1-4に「:1 人が地上にふえ始め、彼らに娘たちが生まれたとき、:2 神の子らは、人の娘たちが、いかにも美しいのを見て、その中から好きな者を選んで、自分たちの妻とした。:3 そこで、主は、『わたしの霊は、永久には人のうちにとどまらないであろう。それは人が肉にすぎないからだ。それで人の齢は、百二十年にしよう。』と仰せられた。:4 神の子らが、人の娘たちのところにはいり、彼らに子どもができたころ、またその後にも、ネフィリムが地上にいた。これらは、昔の勇士であり、名のある者たちであった。」とあります。この状況はどのような状況であったかという、5節「主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。」と、カインとセツの子孫がそれぞれの子孫をだんだんとふやして行ったのですが、地上には悪が増大して来た。「生めよ。ふえよ。地に満ちよ。」と人の数はふえたのですが、それに加えて悪が増大して行ったと聖書は言っています。そういう状況が人の世にあったということです。

そして、「人が地上にふえ始め、彼らに娘たちが生まれたとき、:2 神の子らは、人の娘たちが、いかにも美しいのを見て、その中から好きな者を選んで、自分たちの妻とした。」という状況が生まれたと聖書は教えます。「神の子」、「人の娘たち」というのは一体どういう存在なのか、ここに気をつけて見るべきところがあります。

「神の子」というのは、原語はヘブル語の「ベネ・エロヒム」ということばが使われています。これはヨブ1:6、2:1、また38:7などに出て来ることばです。ことばの意味は「天使」です。ですから、まずこの「神の子」は天使であるという説があります。ところがイエス様はマタイ22:30で「復活の時には、人はめとることも、とつぐこともなく、天の御使いたちのようです。」と言われました。天使はめつたり、とついだりすることはないと言われたので、天使説は消えます。

あと三つの説があるのですが、その次の説は、この「神の子」は正しい天使ではなくて墮落した天使ではないかというものです。サタンが天から落とされた時に一緒について来た悪い天使たちです。私たちが聖書を読む時「悪霊つき」というのを見ますが、そういう存在か、あるいは悪い天使が人のかたちを取って来たという説です。ことばの意味を考えるならば「神の子」は天使だけれども、正しい天使はそのようなことはないといエス様が言われるわけですから、悪い天使なのではないかと考えられるわけです。次は、非常に権威を持った地上の王が自分の好きなように人々の娘たちをめとったという考え方は、一番多いのは「神の子」というのはセツの子孫、「人の娘」はカインの子孫ではないかという説です。このような四つの説があります。基本的には二つ目の墮落した天使説が一番有望ではないかと思うのですが、聖書の中にはっきりと答えがないのでわからないというのが正しいかもしれません。

そして、神様がどのように考えられるかを考えないで、外見から自分たちの好きなものを選ぶようになり、地上の王たちもそうするようになって、一夫多妻制が生まれた。好きなように女性を選んで性的な関係を結んだことを意味しています。

そのような状況が起きた結果、「ネフィリム」という存在が発生したというのです。ギリシャ語の七十人訳聖書では「巨人」と記されています。でもことばの意味を考えると、これはヘブル語の「ナーファル」、落ちるといのが語源だと言われていますから、墮落した存在、正しい関係で生まれた子でない子どもたち、だから墮落した状況を表し、そういう状況が発生したということを行っている。人は好きなように生きる、自分たちの思いどおり飲み食いし、生きて、放蕩の限りを尽くす、悪の限りを尽くす。男女間の関係では、神様の定められた以外のルールを自分たちの思いどおりに適用するような状況に置かれたのだというわけです。

(2) 地上に悪が増大した 5-12節

5-12節では地上に悪が増大したということが記されています。人が「その心に計ることがみな、いつも悪いことだけ」と聖書は言っています。

(3) 神の決断 7、13節

そこで神様は決断されるわけです。7節「そして主は仰せられた。『わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜やうもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを残念に思うからだ。』」と、「残念に思」った、心を痛められたと聖書は言っています。神様は後悔されることはありませんから、「しまった、人間を造らなければよかった」と思われることは絶対になかったのです。全知全能の神、永遠の神様ですから、こういうことが起きることは承知されて人を造った。アダムが罪を犯すことも知っておられた。だから後悔はないのですが、心は痛められたということです。私たちの理解できることばで表現すれば、神様の心の状態はこのようであったと、聖書は教えるわけです。

そして13節「そこで、神はノアに仰せられた。『すべての肉なるものの終わりが、わたしの前に来ている。地は、彼らのゆえに、暴虐で満ちているからだ。それで今わたしは、彼らを地とともに滅ぼそうとしている。』」とあります。人類を滅ぼしてしまおうという神様の決断でした。その時、アダムの子孫たちが、セツとカインの子孫を含めてまだいたわけですが、この地上からすべてを葬り去ろうと考えられたわけです。

(4) 主の心になかったノア 8-10節

ここで8-9節「ノアは、主の心になかった。これはノアの歴史である。ノアは、正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。」と、主の心になかったノアが出て来るわけです。彼は神の前に正しい、そして人の前に全き人であったと聖書に記されています。神の前に正しいというのは罪がないというわけではありません。先ほども学びましたように、アダムのかたちを取って来た子孫ですから、必ず罪の性質はありましたが、ここで神様の前に「正しい人」と言われたのは、義と宣告された、義と認められた、義認められた人だと神様はごらんになったという意味です。エゼキエル14:14では「たとい、そこに、ノアとダニエルとヨブの、これら三人の者がいても、彼らは自分たちの義によって自分たちのいのちを救い出すだけだ」と記されています。「義によって」というのは、主の心になかったという意味です。罪はあったけれども、ノアの正しい信仰の心とその歩み方をごらんになって、神様はノアをそのように思われたと言うのです。新約聖書ヘブル11:7でも「信仰によって、ノアは、まだ見えない事柄について神から警告を受けたとき、恐れかしこんで、その家族の救いのために箱舟を造り、その箱舟によって、世の罪を定め、信仰による義を相続する者となりました。」とあります。「その家族」——ノアの

奥さんと三人の息子セム、ハム、ヤペテとその奥さんたちで8人の家族の救いのために箱舟を造ったのです。もちろんお父さん、おじいさんもいるのですが、聖書はこのように記しています。信仰によって彼はその箱舟に入って行くわけです。このヘブル書を注意深く見ると、「その箱舟によって、世の罪を定め」と記されています。この箱舟に乗るか乗らないかでその人が生かされるかどうかが決まるのです。箱舟に乗ることを考えるのは、自分たちひとりひとりではなくて神様がお決めになることですが……。

2) 神の命令 6:14-21、7:1-6

またこの箱舟を造るに至って長い歴史が始まるわけですが、まず神様は、箱舟を造りなさい、箱舟に入りなさい、箱舟から出なさいと三つの命令をされました。

(1) 箱舟を造りなさい 14-15節

6:14「あなたは自分のために、ゴフェルの木の箱舟を造りなさい。箱舟に部屋を作り、内と外とを木のやいで塗りなさい。」と言われました。どのような箱舟を造ればいいのかは15節以下に記されていますが、1キュビトを45センチと換算すると、長さは135メートル、高さが13.5メートル、幅は22.5メートル、おおよそこのようなサイズになります。排水量で約4万トンの大きな船です。船というと、舳先(へさき)があって後ろに艫(とも)があるようなものを想像しますが、そういったものではなく、ここでは箱型の舟を造るようと言われました。なぜ箱型の舟なのかというと、ノアの家族とすべての種類に従った動物たちが入って大洪水が来た時に、一番安定した安全な形だったということを見ます。そしてそれには舵も推進器、いわゆるスクリューなど船を進めるものもなかったと言うのです。その舟をどこへ進めるかは人間の考えではなくて、神様の意思によって運ばれる。だから舵も推進器も要らないのです。ただ安全に浮かんでいることが大事だった。そういう舟を造るようと言われたのです。

(2) 箱舟にはいりなさい 6:18、7:1

6:18で神様は「箱舟にはいりなさい」と言われました。7:1でも言われました。この「はいりなさい」ということばは非常に大事なことばです。ことばの意味は「はいて来なさい」です。もし誰かがどこかの部屋に入る時、皆さんだったら「おはいりなさい」と言いますよね？もし皆さんが中におられたら、「はいて来てください」と言いますよね？「おはいりなさい」と「はいて来てください」では意味が違います。何が違うかというと、中に人がいるかないかです。このことばは、神様がこの箱舟の中に臨在されるということの意味をしています。神様が中に臨在されて、はいて来た人たちとともに主がおられるということの意味しているわけです。

そして動物たちも箱舟にやって来ます。6:20に「各種類の鳥、各種類の動物、各種類の地をはうものすべてのうち、それぞれ二匹ずつが、生き残るために、あなたのところに来なければならない。」と書いてあります。また、きよい動物たちは七匹あるいは七つがいが入るようにと神様は命じられました。(7:2) たくさんの種類があります。種類に従って、種に従って、この8人でその動物を一堂に集めることは非常に大変なことでした。私たちにはできません。けれども、神様がそのようにしてくださったと聖書は教えます。7:8-9を見ると、「きよい動物、きよくない動物、鳥、地をはうすべてのものの中から、神がノアに命じられたとおり、雄と雌二匹ずつが箱舟の中のノアのところにはいて来た。」、動物たちが自分たちで入って来たと言っています。こんなことがあるだろうか——。人間には考えられないけれども、神様にはおできになります。

私たちはいろいろな動物が帰巢本能を持っていることを知っています。みつばちであれば蜜を集めに行き、また自分の巣に帰って来る。道にしるしがついているわけでもない、空を飛んで来るのですからわからないはずなのに、ちゃんと自分の巣に戻ります。空飛ぶ鳥、渡り鳥などはシーズンごとに遠く離れたところを行ったり来たりして、1年たったらちゃんと自分の作った巣のところに帰って来る。だからこんなことは神様のことばで考えれば当然のことと私たちは見ることができると言えます。人間にとって心配は要らなかったと言うことができます。

3) 命令の実行 6:22、7:7~

(1) すべて神が命じられたとおりに行なった 6:22、7:5、9

このようにしてノアは神様のご命令を守ったのです。6:22、7:7以下を見ると、神様が命令されたそのことをノアがどのように行なったかを見ることができます。6:22「ノアは、すべて神が命じられたとおりにし、そのように行なった。」、7:5には「ノアは、すべて主が命じられたとおりにした。」、9節「神がノアに命じられたとおり、……はいて来た。」、16節「はいたものは、すべての肉なるものの雄と雌であって、神がノアに命じられたとおりであった。」と言うわけです。いかがでしょう？アダムは失敗しましたが、ノアは神様に言われた命令を忠実に守りました。それによって「信仰による義を相続する者とな」ったと先ほど学びました。そのような人でした。神様の恵みを得たのです。

そして時は100年を経過して行くのですが、6:3を見ると、「そこで、主は、『わたしの霊は、永久には人のうちにとどまらないであろう。それは人が肉にすぎないからだ。それで人の齢は、百二十年にしよう。』と仰せられた。」とあります。このような暴虐な悪が世にはびこっているその時から、神様は人を滅ぼそうと考えられ、そこで「人の齢は、百二十年にしよう」と言われたのです。これは大体百年という概数を表すと考えられていますけれども、100年期間をあげよう、その間に箱舟を造りなさいと神様は言われた。そしてノアは500歳の時から600歳に至るまで100年かかって8人で箱舟を造り上げたのです。それだけの年数を経たわけです。多くの人々は自分の好きな生活をしていました。恐らくノアたちを見てあざわらったことでしょう。陰で悪口を言う者もあれば、面と向かって「おまえ、なんてばかなことをしているのだ」と彼らをののしった人たちもいたかもしれません。とにかく「人の齢は、百二十年」、約100年にしよう、今から100年後だと神様が言われたことを私たちは見ることができます。

(2) やにで覆う 6:14

神様が造るように命じられた箱舟はその内面、入口を木のやにで覆われたと6:14に書かれています。これには非常に意味があります。ここで使われているヘブル語のコフェル、覆うということばはレビ記17:11では「贖う」と訳されています。だから内側をやにで覆われたことによって、この箱舟は神様の贖いと非常に関係があると見ることができるのです。

2. 洪水 7:10~

1) 大洪水が起こった 10・17節

そして「大洪水」が起こります。アダムが神様によって造られてから、歴史を足して行くと1656年後だと計算することができます。この洪水、マバールということばはノアの洪水の時だけに用いられるヘブル語です。語源はアッシリア語の破滅ということばと関連があると考えられています。「大洪水」は水による悲劇とも訳されます。ギリシャ語で書かれた七十人訳聖書では、カタクリュスモス、大変動という意味のことばが用いられています。破滅や大変動を意味する出来事が起こったということです。詩篇104:4-9には、どのような状態で地が盛り上がり、海ができというふうなことが記されています。こういった大変動が地球上に起こったということが記されています。

(1) 洪水始まる 7:11

まず洪水が始まりました。7:11、それはノアが600歳の「第二の月の十七日」、「天の水門が開かれた。」とあります。その時までは恐らく雨は降らなかったでしょう。大水が来ると言っても、何のことかわからないので恐らく人々は信じなかったでしょう。しかし、神様が創造された第二日に水は天の水と地の大水との分けられたと書いてありますから、空と地の中に大量の水があったことを私たちは思い起こすことができます。その「天の水門が開かれた」、そして「四十日四十夜」大雨が続いたのです。そして24節には150日間水はふえ続けたとあります。

(2) アララテ山に 8:4

8:4を見るとやがて「七の月の十七日に、アララテの山」に漂着したと記されています。アララテ山というのは現在のトルコの東にある海拔約5200メートル弱の山です。当時も同じ高さかどうかはわかりませんが、このような山が現存します。そこに漂着したということです。

(3) 鳩が戻って来る 8:5-6

そして、ノアは最初にカラスを放って、その後で鳩を放つのですが、鳩を放った様子が8章に記されています。この鳩がオリーブの若葉をくわえて戻って来たのが第十一の月の十七日と記されています。

(4) 地が乾き切る 8:14

地が完全に乾き切ったのは8:14にノア601歳の「第二の月の二十七日」でした。すなわち1年と10日たって水が引いて地が乾き切った状態になったと聖書は記しています。

2) 主ご自身がその戸を閉ざされた 16

神様はノアたちの家族を箱舟の中に入れて、ご自身がその戸を閉ざされましたが、その戸から出るように、先ほどの三つの命令一つ、8:16で箱舟から出るようにと言われました。

3) ノアの家族と箱舟にいたものたち以外はすべてのものが死に絶えた 7:21-23

21-23節にすべてのいのちの息を吹き込まれたものは死に絶えたと記されています。もう箱舟の外には生きているものはいなかった。そういう状況にあつて彼らの家族と種類に従って乗せられた動物たちは出て来たということです。

4) 感謝の捧げ物 8:20-21

8:20、彼らはそのような状況にあつて何をしたか——。「:20 ノアは、主のために祭壇を築き、すべてのきよい家畜と、すべてのきよい鳥のうちから幾つかを選び取って、祭壇の上で全焼のいけにえをささげた。:21 主は、そのなだめのかおりをかかれ、主は心の中でこう仰せられた。「わたしは、決して再び人のゆえに、この地をのろうことはすま

い。人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ。わたしは、決して再び、わたしがしたように、すべての生き物を打ち滅ぼすことはすまい。」とあります。聖書の中で「祭壇を築」くということばが初めて出て来たところで、神様に感謝を表したのです。

孫のあかりはいつも食事の前に「かみしゃま、かんしゃします。いつもありがとございましゅ、イエスさまのおなまえによっておいのりしましゅ」と、どこまでことばの意味がわかっているかわかりませんが祈ってくれます。ノアは家族とともに自分たちが救われたその喜びをまず犠牲を捧げて感謝しました。そのために七つがい、あるいは七匹のきよい動物を乗せていましたから、その動物を血を流して殺して、全焼のいけにえとして捧げたということを見ることができます。

3. 神の契約 9：1-17

このようなことがあって、もう二度と人をこのようにして滅ぼすことはすまいと神様は言われました。9：1から神の契約が記されています。神様は再びノアとその家族に言われます。1節「生めよ。ふえよ。地に満ちよ。」、アダムに対して1：28で言われた祝福が、もう一度ノアとノアの家族にもたらされたのです。これは条件なしの恵みの契約です。神様は9節で「わたしはわたしの契約を立てよう。」と言われました。この「契約」ということばには重要な意味があります。ヘブル語のベリースということばが用いられています。旧約で286回、神からの一方的な約束がなされました。私たちの契約の場合は、契約当事者AとB、あるいは甲と乙、必ず双方が結ぶものですから、お互いに判を押し合うわけです。この約束に間違いありません、違反したらこうしますということです。この「契約」は神様の一方的な「契約」ということばが用いられています。だから神様がノアとその家族、アダムの十代目の子孫に対して、無条件の恵みの契約をされたと見ることができます。その「契約」のしるしが虹でした。

9：12-13を見ると、「：12 さらに神は仰せられた。『わたしとあなたがた、およびあなたがたといっしょにいるすべての生き物との間に、わたしが代々永遠にわたって結ぶ契約のしるしは、これである。：13 わたしは雲の中に、わたしの虹を立てる。それはわたしと地との間の契約のしるしとなる。』」と記されています。

「虹」は神様と人類との間に結ばれた永遠の結び、「契約」のしるしなのだというわけです。

エゼキエル1：28では、雲の中に浮かぶ「虹」ということばが出て来ます。そして神の栄光を現わすのだと書かれています。これは永遠の「契約」で、二度と大洪水ですべての肉なるものを滅ぼすことはないという11節に記されています。

4. 新約聖書の説き明かし マタイ24：37

さて、新約聖書はどのように言っているでしょう。マタイ24：37-39では「：37 人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようなからです。：38 洪水前の日々は、ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついたりしていました。：39 そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。」と言っています。「人の子が来る」、ヨハネの黙示録の学びの中で私たちはそのことを聞きました。人の子が雲に乗って来られる、すなわちイエス・キリストが王としてこの地上に来られる時がある。そしてその前に7年間の大患難時代が来ると聖書は言っています。その警告として、このノアの洪水はあったのだというわけです。

「ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついたりしていました。」、どこかで聞いたような話が出て来ます。それは現在の世界を見てもそのとおりだと私たちは教えられるのです。今の世界はまさにそうです。私たちの近くでは、自分のことしか考えない人たちがいます。都合が悪ければ情け容赦なく人を殺し、人を傷つけます。個人的なものでなくても、国と国、あるいは人種と人種の間でもそのような闘いがあることを私たちは見ることができます。昨日でしたか、四つのテロが起きて100人を超える人たちがいのちをなくしたことをテレビで見ました。傷ついた人たちも大勢います。そういったテロも世界的な傾向にあります。日本でもそういったテロに巻き込まれるような現在の動きを私たちは垣間見ることができます。アメリカでは憲法裁判所が同性結婚は憲法に合っているという判断を下したのです。それまでアメリカでは4つの州でそれは憲法違反であると判断をしていました。だから男性と男性の、あるいは女性と女性の結婚は認められないと言っていたのですが、連邦の憲法裁判所がそれは正しいという決断を下し、オバマ大統領はそれを大変喜んだと新聞に記されていました。

また福音派の教会の牧師が、そのことは聖書に照らし合わせて見る時に正しいことだと教会の集会で語ったそうです。その集会では約7割の人が男性と男性、女性と女性の結婚状態にある人たちだったからかもしれませんが、福音派の牧師が聖書に基づいてそのような判断をするというのは間違っていないのでしょうかと思うのです。聖書がどう教えているかではなくて、みんな平等だよといかにももっともらしい考え方によって、人間の考えを優先して物事を決める時代になってきている。まさにノアの時代のようなことになっていることを聖書は警告しているのです。

2ペテロ2：5「また、昔の世界を赦さず、義を宣べ伝えたノアたち八人の者を保護し、不敬虔な世界に洪水を起こされました。」、2ペテロ3：6-7「当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。：7しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びの日まで、保たれているのです。」とあります。水によっては二度と滅ぼさないとされた神様ですが、火によって「不敬虔な者どものさばきと滅びの日」が来ると宣言しておられます。

私たちは、教会はどうでしょうか？話を少し前に戻してエノクは死を見ないで天に上げられました。彼は正しかったからです。ヘブル11：5によれば、「信仰によって、エノクは死を見ることのないように移されました。神に移されて、見えなくなりました。移される前に、彼は神に喜ばれていることが、あかしされていきました。」、神に喜ばれる人たちは、このようにして死を見ないで天に移されるという一つのひな型をここに見ることができます。1テサロニケ4：16-17に、「：16主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、：17次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らと一しょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。」とあります。先に召された人たちがよみがえった後で、地上に残されていた生きていた者が死を見ないで雲の中に引き上げられる。エノクはまさに教会の空中携挙のひな型なのです。感謝なことだと思われませんか？

ユダ14-15には、「：14 アダムから七代目のエノクも、彼らについて預言してこう言っています。『見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。：15 すべての者にさばきを行ない、不敬虔な者たちの、神を恐れずに犯した行為のいっさいと、また神を恐れない罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて、彼らを罪に定めるためである。』」とあります。ノアはその当時の伝道者でした。彼の信仰を通して、彼の行ないを通して、多くの人たちが神様を信じるはずでしたが、一切見向きもしなかった。残念ながら彼の家族以外は救われなかったのです。

私たち生かされているクリスチャンたちは、現代のノアです。滅びの時が必ず来る。イエス・キリストがこの世にやって来られる。だからイエス・キリストを信じなさいと私たちは伝えなければならないということです。もちろん多くの人たちがそのことばに耳を貸さないとします。けれども、私たちのことばや行ないによって、なるほど神様がおられて、私たちには救いが本当に必要なのだということを知っていただくために働きを託されていることを思い起こすことができます。ヨハネの黙示録22：20には「これらのことをあかしする方がこう言われる。『しかり。わたしはすぐに来る。』アーメン。」とあります。「これらのことをあかしする方」、イエス・キリストです。イエス・キリストが、そうだ、「わたしはすぐに来る。」と。まことにそのとおりです。私たちの応答は「主イエスよ、来てください。」です。これで聖書は終わります。私たちはそのようにイエス・キリストの来られるのを待ち望むとともに、火によって人々が本当にさばかれることがないように、与えられた機会を通して福音を宣べ伝える必要があると教えられます。

ぜひ私たちの証を通して伝道の働きを続けて行きたいと願って、おひとりおひとりがこの一週間を歩まれることを心からお勧めしたいと思います。